

【資料】

## 家族関係単純図式投影法の基礎的研究 II

— 家族図式の妥当性 —

草 田 寿 子

## A Study on Figure of Family Relationship II

— Validity of Figure of Family Relationship —

Hisako Kusada

We have made some reports on the Schematic Projective Techniques of family relationships, i. e. relationships between father and mother, father and child, and mother and child.

The purpose of this study is to examine how the distances among each family members in the figures of Schematic Projective Techniques are related to “family cohesion”, “family health”, and “family satisfaction”. Subjects, 50 male and 329 female university students, were asked to make figures of family relationships. Then they completed a questionnaire, which consisted of a family cohesion scale, a family health scale, and 4 family satisfaction items.

Main findings were as follows :

- (1) Those who made close figures as to each family members in Schematic Projective Techniques had higher scores of family cohesion, family health, and family satisfaction than those who made distant figures.
- (2) For those who made close figures, the subject's free descriptions of figures were positive, but for those who made distant figures, the descriptions were not always negative.

家族関係単純図式投影法とは、水島（1978）によって考案された図式的投影法の一つで、家族成員を表す一円玉大の円形コマを用いて、家族関係を図式化させる簡単な投影法である。Figure1に、ある中学生が実際作成した家族図

式を例示した。

この投影法は、心理測定、心理診断として有効なだけでなく、心理療法の媒体としても有効で、心理治療的洞察過程を深めることができる方法とされている（水島・安武，1992；水島，

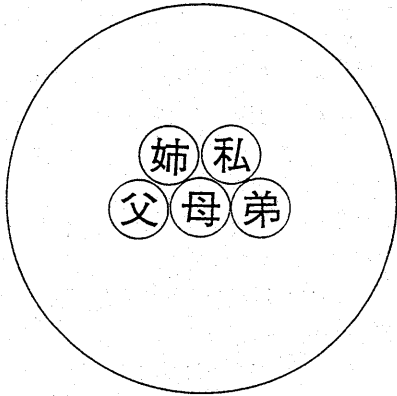


Figure 1 中学生が作成した家族図式の例  
図式に対する本人自身の説明：  
みんな仲良く心が離れてること  
はないです

1993) .

草田 (1994) は、家族関係単純図式投影法が家族関係を診断・査定する測定道具として、実際有効かどうかを検討した。その結果、①家族図式上の各成員間の距離 (父母、父子、母子間の距離) は、家族の健康度、家族の凝集性、家族への満足度と関連が深いこと、②家族の健康度の程度により、家族図式と図式に対する本人 (被験者) の説明に差異があることが見いだされた。これらの結果から、家族関係単純図式投影法を用いて、健康な家族とそうでない家族を弁別することが可能であり、この投影法が家族アセスメントの方法として、有効であることがある程度認められた。

そこで、本研究では前論 (草田, 1994) に引き続き、家族関係単純図式投影法の妥当性について検討し、この方法を家族関係査定法として一般に広めていくことがねらいである。ここでは、紙数の関係上、前論で検討できなかった次の仮説を具体的に検討する。

仮説 1 : 家族図式において、各成員間の距離、すなわち父母、父子、母子、3者間の距離が近い群は、遠い群に比べて家族の凝集性が高いであろう。

仮説 2 : 家族図式の各成員間の距離が近い群は、遠い群に比べて家族の健康度が高いであ

ろう。

仮説 3 : 家族図式の各成員間の距離が近い群は、遠い群に比べて家族への満足度が高いであろう。

さらに、今回は家族図式の各成員間の距離のうち、3者間の距離、すなわち父母、父子、母子の距離の和に着目し、この距離が近い群と遠い群では、図式に対する本人 (被験者) の説明の内容に差異がみられるかを検討する。前論の結果から、次のことが予測される。

仮説 4 : 3者間の距離が近い群は家族に対して肯定的な表現が多く、反対に遠い群は家族に対してどちらかという否定的な表現がみられるだろう。

## 方 法

被験者 127名 (男子50名, 女子77名) で、平均年齢は18.7歳。草田 (1994) の被験者と同一である。

家族関係単純図式投影法 材料と手続きについては、草田 (1994) を参照されたい。現実の家族関係と理想の家族関係を図式化させたが、ここでは現実の家族関係のみを分析の対象とした。

質問紙の構成 質問紙は、草田 (1994) で使用した日本語版 F A C E S III, 家族健康尺度、家族への満足度を測定する4項目から構成されていた。今回は日本語版 F A C E S III の下位尺度のうち、凝集性尺度だけを分析に用いた。また、家族への満足度を測定する項目については、家族全体への満足度を評定する1項目だけを取り上げた。なお、凝集性尺度と家族健康尺度のクロンバックの  $\alpha$  係数は、順に .87, .90 で、両尺度とも十分に信頼性が高いといえる。

## 結果と考察

### 仮説 1 の検討

家族図式における父母、父子、母子、3者間の距離を mm 単位で測定し、各距離ごとに被験者を上位群と下位群に分けた (Table 1)。各距離の上位・下位群の凝集性尺度得点の平均を Figure 2 に示した。t 検定の結果、いずれの距離においても有意差が認められた (父母、

$t = 2.09$  (48),  $p < .05$ ; 父子,  $t = 5.30$  (56),  $p < .001$ ; 母子,  $t = 2.74$  (54),  $p < .01$ ; 3者間,  $t = 4.13$  (57),  $p < .001$ ). したがって, 家族図式の各距離において, 近い群は遠い群に比べて, 凝集性尺度得点が有意に高く, 仮説1が支持された。

Table 1 家族図式における各距離の上位・下位群

	上位群 (遠い群)			下位群 (近い群)		
	%	人数	レンジ	%	人数	レンジ
父 母	26.2	32	40-98	27.0	33	11-22
父 子	24.4	30	61-147	24.4	30	16-33
母 子	27.0	34	45-132	27.0	34	15-24
三者間	24.6	30	143-326	24.6	30	52-86

### 仮説2の検討

家族図式における各距離の上位・下位群の家族健康尺度得点の平均を求めた (Figure 3).  $t$  検定の結果, いずれの距離においても有意差が認められた (父母,  $t = 2.91$  (57),  $p < .01$ ; 父子,  $t = 4.75$  (52),  $p < .001$ ; 母子,  $t = 2.81$  (55),  $p < .01$ ; 3者間,  $t = 3.96$  (50),  $p < .001$ ). この結果は, 家族図式の各成員間の距離において, 近い群は遠い群より, 家族健康尺度得点が有意に高いことを示しており, したがって仮説2が支持されたといえる。

前論では, 家族健康尺度得点の高・低群により, 家族図式の各成員間の距離に差がみられるかを検討した. その結果, 父母, 父子, 3者間の距離で有意差が認められたものの, 母子の距



Figure 2 家族図式における各距離の上位 (遠)・下位 (近) 群の凝集性尺度得点の平均

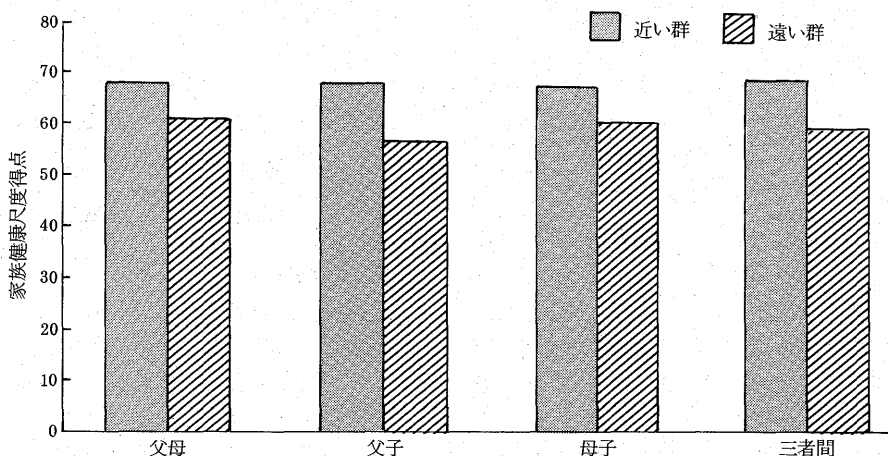


Figure 3 家族図式における各距離の上位 (遠)・下位 (近) 群の家族健康尺度得点の平均

離だけは差が見いだせなかった。それゆえ家族の健康を測定するうえで、特に父母と父子の距離が重要な指標であると指摘した。しかし、今回の結果では、母子の距離においても近・遠群の家族健康尺度得点に差がみられているので、家族の健康を評定する際、父母、父子の距離だけではなく、母子の距離も無視できない距離であることが示された。

**仮説3の検討**

家族図式における各距離の上位・下位群の家族全体への満足度得点の平均を求めた (Figure 4)。t検定の結果、いずれの距離においても有意差が認められた (父母,  $t=3.05 (63)$ ,  $p<.01$ ; 父子,  $t=2.78 (58)$ ,  $p<.01$ ; 母子,  $t=2.93 (66)$ ,  $p<.01$ ; 3者間,  $t=3.37 (58)$ ,  $p<.01$ )。したがって、家族図式の各距離において、近い群は遠い群に比較して、家族全体への満足度得点が有意に高く、仮説3が支持された。

**仮説4の検討**

家族図式における3者間の距離の上位24.6%を上位(遠)群(30名)、下位24.6%を下位(近)群(30名)とした。上位・下位両群の被験者自身による図式に対する説明(文)をTable 2に示した。説明文はほぼ原文の通りである。まず、近群では男5名、女25名と圧倒的に女子が多かった。これは、男子に比べて女子の方が、家族(親)との心理的な結び付きが強

い傾向にあることを示しているように思われる。図式に対する説明文の内容をみると、何でも話せる、まとまりがある、明るいなど、家族に対して肯定的に記述したものが多く、否定的な表現はほとんどみられなかった。次に、遠群をみると、男女の割合は男16名、女14名とほぼ同人数であった。図式に対する説明文の内容は、バラバラ、自分勝手にまとまりがない、理解し合っていないなど、近群にはみられなかった否定的な記述がいくつかあるものの、一方では普通(平凡)の家族、明るい家族、うまくいっているなど、むしろ家族を肯定的に記述している例もみられた。そしてこの肯定的な記述は、遠群のなかでも3者間の距離が近い被験者に多くみられた。これらの結果は、家族図式における3者間の距離が近い群では、図式に対する説明文の内容も肯定的な記述が多い傾向にあるが、3者間の距離が遠い群では、図式の説明が必ずしも否定的なものとは限らないことを示している。したがって、仮説4は近群においては支持されたが、遠群では支持されなかった。

中学1年生においては、父、母、子の3者間の距離が近い家族図式を作成したものがほとんどで、この距離が離れていると、家族の絆が弱く、家族になんらかの問題をかかえているようなケースが多かった(草田・水島・大平・岡本, 1990; 岡本・水島・草田・大平, 1990)。これに対し、大学生の場合は、家族図式の3者間の

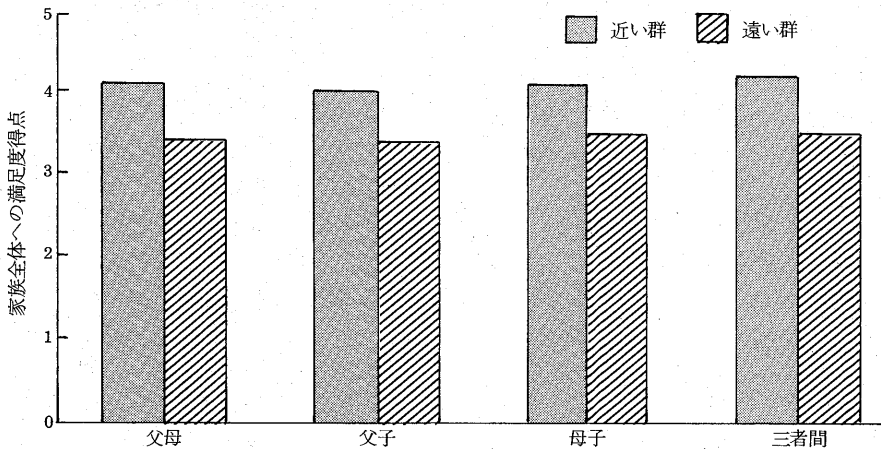


Figure 4 家族図式における各距離の上位(遠)・下位(近)群の家族全体への満足度得点の平均

Table 2 3者間の距離における近・遠群の現実の家族図式に対する説明

近 群 (男5名, 女25名)	遠 群 (男16名, 女14名)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・たむろうのが好きだが、頭の硬い家族</li> <li>・お互いに自分のしたい事をしているが基本的には頼って信頼している</li> <li>・楽しくて、自分の意見をはっきりいう家族</li> <li>・それぞれ自由にやっている</li> <li>・クレヨンしんちゃんのような家族で、幸せ</li> <li>・ほとんどの事は話せる家族</li> <li>・3人とも平等な関係で明るい</li> <li>・特に問題はないが、父親が主権を握っている</li> <li>・両親同士は仲が良い</li> <li>・友達めめちゃくちゃ多い家族、家族ぐるみの付き合いが多い</li> <li>・一応まとまりがあって、安らぎのある家族</li> <li>・一つのことをみんなで一緒にゆったりすることが多く、仲がよい家族</li> <li>・明るい</li> <li>・家族全員で行動することがあまりない家族</li> <li>・両親は立派であるが、私と姉はまだ成長しきれていない</li> <li>・何でも話せる家族</li> <li>・珍しい家族</li> <li>・他の家族にはとても見せられないことも家族4人なら馬鹿丸だしでやってしまうようなとても明るい家族</li> <li>・ごく普通の平和な家族</li> <li>・平凡だけどくだらないことでも話題になる家族</li> <li>・父よりも祖父が決めることが多い</li> <li>・まとまっている</li> <li>・干渉し過ぎず、放任にならず</li> <li>・根が明るく、何事も気にしない、さっぱりした家族</li> <li>・思いきりくつろげる家族</li> <li>・明るい家族</li> <li>・母を中心に物事を進めている</li> <li>・自由で気楽、友人の集まりのような家族</li> <li>・普通の家族</li> <li>・楽しくほがらか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バラバラ</li> <li>・父の考えがわからない</li> <li>・お互いをあまり干渉しない、程よい距離</li> <li>・そこそこの良さがある</li> <li>・記述なし</li> <li>・自分勝手にまとまりがない</li> <li>・「家族」と「他人」にくるくる変わる家族</li> <li>・理解し合っているようで、実は理解していない家族</li> <li>・子供に左右されがちな家族</li> <li>・母中心の家族</li> <li>・だいたいみんな仲がよい</li> <li>・家族全体でどこかへ行くということはない</li> <li>・家庭円満</li> <li>・一つの問題について話し合うことがないせいか、どこかうすっぺらな関係に思える</li> <li>・母親が軸になって動いている、そのため母の負担が大きい</li> <li>・ごく平凡な家族</li> <li>・仲はよい</li> <li>・平凡</li> <li>・なんとなくうまくいっている家族</li> <li>・うまくいっているとも言えないが、問題、危機はあまりない</li> <li>・まあ円満な家族</li> <li>・普通</li> <li>・それぞれが好きなことをできる家族</li> <li>・普通だと思う</li> <li>・ちょっと違うところもあるが、「サザエさん」と「ちびまるこちゃん」と「アサリちゃん」の家族を足して3で割った感じ</li> <li>・明るい家族</li> <li>・明るい家族</li> <li>・良い家族</li> <li>・両親がやや敵しい、母の機嫌によって家族のムードが変わる</li> <li>・一歩家から離れると良い家族</li> </ul>

近群では3者間の距離が近い方から、遠群では遠い方から順に説明文を列挙した。

距離が離れていても、それが極端でない限り、家族関係が必ずしも希薄ではないことが、今回の研究結果から明らかになった。

中学低学年以前(中1以前)の親子関係は、子どもの親への信頼と依存を基調とし、比較的安定した時期とみなすことができる(谷井・上地, 1993)。一方、大学生の親子(家族)関係の特徴は、子どもが親から心理的に独立することである。

このように家族発達の観点からみれば、家族図式において、大学生が3者間の距離が離れた

図式、特に自分を父母から離れた図式を作成したからといって、中学生の場合のように、親子関係に葛藤や問題があると考えただけではなく、青年期の家族発達段階の特徴であり、親からの自立を表している可能性もあると多面的にとらえる必要があることが示された。

## 結 論

以上、家族関係単純図式投影法が家族関係査定法として妥当性があるかどうかを検討してきた。

その結果、家族図式において、各成員間の距離、すなわち父母、父子、母子、3者間の距離が近い群は、遠い群に比較して家族の凝集性、家族の健康度、家族への満足度が高いことが示された。このことは、家族図式における各成員間の距離という指標が、家族の凝集性、家族の健康度、家族への満足度の程度を予測し、弁別するのに有効であることを示している。

しかし一方では、大学生の場合、3者間の距離が離れた家族図式を作成したからといって、その距離が極端でないかぎり、中学生の場合のように(草田ら, 1990)、家族がバラバラで、家族関係に何らかの問題があると一概に言えないことが、家族図式の被験者自身による説明から明らかになった。

いずれにしても家族関係単純図式投影法を家族関係査定法として用いる場合には、作成された家族図式に対して、被験者(ないしクライアント)に説明してもらうことが非常に大切なことだといえる。そうすることにより、家族に関する情報がより多く収集され、家族関係を的確に査定するうえで多に役に立つと思われる。さらに家族図式を解釈する際、作成した被験者の家族発達段階も考慮して慎重に解釈することも当然必要であろう。

## 引用文献

- 草田寿子・水島恵一・大平英樹・岡本かおり 1990  
図式的投影法による家族関係の研究(3) 日本家族心理学会第7回大会発表論文集, 20.
- 草田寿子 1994 家族関係単純図式投影法の基礎的研究—家族関係査定法としての可能性—(投稿中)
- 水島恵一 1978 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ 文教大学紀要, 12, 1-11.
- 水島恵一・安武良志子 1992 パーソナル・コンピュータによる図式的投影法 カウンセリング研究, 25, 1, 9-18.
- 水島恵一 1993 図式的投影法 岡堂哲雄(編) 心理検査学 276-298.
- 岡本かおり・水島恵一・草田寿子・大平英樹 1990  
図式的投影法による家族関係の研究(4) 日本家族心理学会第7回大会発表論文集, 21.
- 谷井淳一・上地安昭 1993 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, 26, 2, 113-122.

## 付記

本研究の一部は文教大学平成6年度人間科学部共同研究費(研究代表者:水島恵一)により行われた。